

統語的派生再論*

江 畑 冬 生

1. はじめに

筆者は江畑 (2011) などにおいてサハ語の一部の派生接辞が通言語的な特異性を有することを指摘し、そのような派生プロセスを「統語的派生」と呼んできた (一方で通言語的な特異性を持たない派生プロセスを「語彙的派生」と呼んだ)¹。江畑 (2012b: 334) では、統語的派生を「語の形態的緊密性に反し、派生の語基の有する文法範疇を部分的に保持することが可能な派生」と定義した。統語的派生の特異性は、特に動詞からの派生において「派生の語基が依然として統語的な力を有している」点に顕著である。

統語的派生とはどのような性格のものであるのか、公刊された論文において述べたものは無い (前述の江畑 (2011) は口頭発表, 江畑 (2012b) は未公刊の博士論文である)。そこで本稿では、サハ語の統語的派生の特質について改めて明確にする。さらに統語的派生が周辺の諸言語にも見られることを示すとともに、通言語的に統語的派生を位置づける。

¹ 本論文は平成 25 年度新潟大学プロジェクト推進経費 (奨励研究)「ユーラシア北東部諸言語における派生形態法の研究」による研究成果の一部であり、平成 26 年度新潟大学人文学部研究推進費の支援を受けている。本論文におけるサハ語のデータは、筆者自身による現地調査およびサハ語新聞 *Кыым* の電子版から得ている。

サハ語はロシアのサハ共和国を中心に分布するチュルク系の言語であり、その話者数は約 45 万人である。母音調和規則と子音交替の結果、サハ語の接尾辞は多数の異形態を有する。本稿ではスモールキャピタルを代表形として用いることにより異形態を有する接尾辞を表記している。

2. 一般言語学的に見た派生

統語的派生の特異性について論じる前に、本節では、派生形態法が有する通言語的な性質について確認しておく。

派生とは、新たな語幹を形成する手法の1つであると位置づけられる。この立場を簡潔に説明するものに Aikhenvald (2007: 35) の “Derivational morphology results in the creation of a new word with a new meaning.” があり、同様の指摘は Bauer (1988: 73), Katamba (1993: 47), 亀井 他編 (1996: 1066) 等にも見られる。派生形態法の性質は、屈折と対比することによっても明確になる。江畑 (2013b) でも論じたように、派生形態法には一般に、品詞を変えうる、義務的ではない、非生産的・不規則、統語法と関連しない、という特徴が見られる。

派生プロセスにより新たな語幹が形成される際、語基の有する文法的特徴は失われる。例えば、(1)における動詞 *destroy* と比べた時、(2)の派生名詞 *destruction* は主語・目的語を保持する力を失っていることが分かる。Bauer (1988: 82) は、「派生語は単一形態素から成る別の語と置換可能である」 (“derivatives can be replaced by monomorphemic forms”) と述べている。動詞からの派生名詞は、あくまで名詞なのである。

- (1) *The enemy destroyed the city.*
- (2) *the enemy's destruction of the city*

ところがサハ語の統語的派生においては、通言語的な性質とは異なり、語基の有する文法範疇を部分的に保持することが可能である。以下、第3節では名詞からの派生、第4節では動詞からの派生の例を見ていく。

3. サハ語における統語的派生：名詞からの派生

第1節でも述べたように、統語的派生の特徴は、語基の有する文法範疇が部分的に保持される点である。サハ語において、名詞語幹に付加する統語的派生接辞は4つある。これらはいずれも、派生接辞でありながら複数接辞に後続するという特異性を有する。

3.1 Proprietary の接尾辞-LEEX

接尾辞-LEEX は主として「～を持った」を表す。この接尾辞が付加した派生語のいくつかの例を(3)に示す（接尾辞-LEEX については江畑 (2012a) を参照されたい）。

- (3) *buhax-taax* 「ナイフを持った」 < *buhax* 「ナイフ」
xarčiu-laax 「金を持った」 < *xarčiu* 「お金」
ojox-toox 「妻のある」 < *ojox* 「妻」

この接尾辞は、(4)に示すように複数接辞に後続可能である。

- (4) *žie-ler-deex* *žon* 「家々を持つ人々」
 家-PL-PROP 人々

3.2 Locative-relational の接尾辞-TEEBI

接尾辞-TEEBI は「～での、～における」を表す。この接尾辞が付加した派生語のいくつかの例を(5)に示す。

- (5) *kyæl-leeši* 「湖での」 < *kyæl* 「湖」
suntaar-daawu 「スンタールでの」 < *suntaar* 「スンタール (地名)」
kyn-neeši 「日々の」 < *kyn* 「日」

この接尾辞も、(6)に示すように複数接辞に後続可能である。

- (6) *kenniki* *kyn-ner-deeši* *xomolto-loox* *statistika*
 最近の 日-PL-LOC.REL 心配-PROP 統計
 「近年における気になる統計」

3.3 Similative の接尾辞-LII

接尾辞-LII は「～のような、～式の」を表す。この接尾辞が付加した派生語のいくつかの例を(7)に示す。

- (7) *oko-luu* 「子供のような」 < *oko* 「子供」
taas-tuuu 「石のような」 < *taas* 「石」
kihi-lii 「人のような」 < *kihi* 「人」

この接尾辞も、(8)に示すように複数接辞に後続可能である。

- (8) *ebeŋki-ler-dii* *xajusxa-nan* *bul-an* *tijj-e-kin*
 エベンキ-PL-SIM 方向-INST 見つける-CVB 着く-PRS-2SG
 「[その湖へは] エベンキ人たちのように方角を頼りにたどり着くのだ」

3.4 動詞派生接辞-LEE

サハ語には名詞語幹から動詞を派生する接尾辞がいくつか存在するが、接尾辞-LEEはそのうちで最も生産性の高いものである。この接尾辞にはいくつかの用法があり、「する」「与える」「行く」などを表す。接尾辞-LEEが付加した派生語のいくつかの例を(9)に示す。

- (9) *yle-lee* 「働く」 < *yle* 「仕事」
belex-tee 「贈る」 < *belex* 「プレゼント」
kuorat-taa 「町へ行く」 < *kuorat* 「町」

この接尾辞も複数接辞に後続可能である。ただし(10)に示すように、複数接辞に後続する場合には専ら「与える」を表す。

- (10) *uuraaxtaavui* *elbex* *kuorat-tar-daa-ta*
 皇帝 多い 都市-PL-VBLZ-PST:3SG
 「皇帝は [部下に] 多くの都市を与えた」

4. サハ語における統語的派生：動詞からの派生

サハ語において、動詞語幹に付加する統語的派生接辞は4つある。これらが付加しても、元の語基は動詞の項構造を保持することがある。

4.1 行為名詞派生接辞

サハ語には動詞語幹に付加し行為名詞を派生する接辞がいくつかあるが、接尾辞-IIおよび接尾辞-(EE)hinはそのうちで最も生産性の高いものである(両接尾辞は相補的分布を示す。前者は主として子音語幹に、後者は主として母音語幹に付加する)。これらの接尾辞が付加した派生語のいくつかの例を(11)および(12)に示す。

- | | | | |
|------|---------------------------|---|----------------------|
| (11) | <i>yæret-ii</i> 「教育」 | < | <i>yæret</i> 「教える」 |
| | <i>uurat-uuu</i> 「廃止」 | < | <i>uurat</i> 「やめる」 |
| | <i>biller-ii</i> 「知らせ、広告」 | < | <i>biller</i> 「知らせる」 |
| | | | |
| (12) | <i>battaa-hun</i> 「圧力」 | < | <i>battaa</i> 「押す」 |
| | <i>atuulaa-hun</i> 「購入」 | < | <i>atuulaa</i> 「買う」 |
| | <i>yæskie-hin</i> 「増加」 | < | <i>yæskie</i> 「増える」 |

これらの接尾辞が付加しても、派生名詞は依然として動詞の項構造を保つ。項構造の保持は、(13)や(14)の出動名詞が対格目的語を保持していることが証拠となる(他の格も同様に保持されるが、対格目的語は連体修飾語としての解釈を許さないため、項構造保持の証拠として最もふさわしいものである)。

- | | | | |
|------|-----------|----------------------|-----------------|
| (13) | <i>as</i> | <i>kultuura-tu-n</i> | <i>yæret-ii</i> |
| | 食べ物 | 文化-POSS.3SG-ACC | 研究する-NMLZ |
| | 「食文化の研究」 | (直訳では「食の文化を研究」) | |

- | | | |
|------|--------------------|----------------|
| (14) | <i>energija-nu</i> | <i>sie-hin</i> |
| | エネルギー-ACC | 食べる-NMLZ |
| | 「エネルギー使用」 | |

4.2 行為者名詞派生接辞

接尾辞-(EE)ččiは、動詞語幹に付加し行為者名詞を派生する。まずは(15)に、接尾辞-(EE)ččiによる派生の例を示す。

- | | | | | | |
|------|---------------------|-------|---|-----------------|--------|
| (15) | <i>aab-aačču</i> | 「読者」 | < | <i>aax</i> | 「読む」 |
| | <i>činčij-eečči</i> | 「研究者」 | < | <i>činčij</i> | 「研究する」 |
| | <i>tæryttee-čči</i> | 「創設者」 | < | <i>tæryttee</i> | 「創設する」 |

接尾辞-(EE)ččiによる派生語もやはり、項構造を保持することが可能である。

- | | | | | |
|------|------------------|-------------------------|--------------------|------------------|
| (16) | <i>kinige-ni</i> | <i>aab-aačču</i> | <i>axsaan-a</i> | <i>avujaa-ta</i> |
| | 本-ACC | 読む-ACTOR | 数-POSS.3SG | 減る-PST:3SG |
| | 「本を読む人の数が減った」 | | (直訳では「本を読者の数が減った」) | |

4.3 可能名詞派生接辞

接尾辞-*imtiE*は、可能名詞(「～しうる」などを表す)を派生する。

- | | | | | | |
|------|--------------------|-------------|---|--------------|-------|
| (17) | <i>tuluj-umtuo</i> | 「耐えられる, 耐性」 | < | <i>tuluj</i> | 「耐える」 |
| | <i>salg-umtua</i> | 「長たらしい」 | < | <i>salt</i> | 「飽きる」 |
| | <i>tost-umtuo</i> | 「もろい, もろさ」 | < | <i>tohun</i> | 「折れる」 |

接尾辞-*imtiE*による派生語もやはり、項構造を保持することが可能である。

- | | | | |
|------|------------------|---------------------------|--------------------|
| (18) | <i>tummuu-nu</i> | <i>tuluj-umtuo</i> | <i>yyneeji</i> |
| | 寒い-ACC | 耐える-POT | 植物 |
| | 「耐寒性植物」 | | (直訳では「寒さを耐えられる植物」) |

5. サハ語の統語的派生の特質

第3節では、名詞からの派生において統語的派生接辞が複数接辞に後続しうることを示した。派生の語基が依然として数の範疇を保持する点で、通言語的に特異である。第4節では、動詞からの派生において統語的派生接辞による派生名詞が対格目的語を保持しうることを示した。派生の語基が依然として項構造を保持する点で、通言語的に特異である。本節では、サハ語の統語的派生の

特質について、特に動詞からの派生を取り挙げ論ずる。統語的派生接辞による派生名詞は、語彙的派生接辞による派生名詞とも非定形動詞（すなわち動詞の屈折形式）とも異なる性質を有するものであり、両者の中間的存在と言える。

5.1 語彙的派生接辞による派生名詞との違い

第4節で取り上げた4つの派生接辞は、語基部分である動詞の項構造を保つという点で特異性を有する。この特異性は、語彙的派生接辞には全く観察されないものである。以下で、行為名詞を派生する2つの接尾辞、すなわち語彙的派生接辞-Iと統語的派生接辞-(EE)hmを比較する。

語彙的派生接辞-Iが付加した動詞語幹は、もはや対格目的語を保持することが不可能であるため(19)は非文になる。それに対し、4.1節で見た統語的派生接辞-(EE)hmは、対格目的語を保持したままの派生が可能である(20)。

- (19) * *dojdu-mu* *tapta-l* [語彙的派生接辞]
 国-ACC 愛する-NMLZ
 (意図した意味： 国を愛すること)

- (20) *dojdu-mu* *taptaa-hun* [統語的派生接辞]
 国-ACC 愛する-NMLZ
 「国を愛すること／祖国愛」

非派生語（すなわち単純語）の名詞には、対格名詞句を支配するものは無い。従って統語的派生接辞による出勤名詞は、単純語の名詞には無い特徴を新たに獲得していることになる。逆に語彙的派生接辞による出勤名詞は、この点では単純語同様に振る舞う。

語彙的派生接辞と統語的派生接辞の違いは生産性にも現れる。統語的派生接辞は、基本的にいかなる動詞語幹にも例外なく付加する生産的・規則的な形式である。一方、語彙的派生接辞は非生産的である。

統語的派生接辞は、態の接辞およびアスペクトの接辞に後続可能だという点においても生産的である。例えば(21)では、行為名詞派生接辞-II（4.1節）が受身接辞に後続している。(22)では、行為名詞派生接辞-(EE)hmが多回接辞に後続

している。対照的に語彙的派生接辞は、態の接辞やアスペクトの接辞に後続することはない²。

(21) *xaačču-ll-uuu* 「提供されること」
提供する-PASS-NMLZ

(22) *kær-ytelee-hin* 「何度も見ること」
見る-ITER-NMLZ

5.2 非定形動詞との違い

4つの統語的派生接辞による出動名詞は、非定形動詞とも異なる性質を有するものである。サハ語の非定形動詞のうち、派生名詞と対比しうるのは形動詞である。形動詞とは動詞の屈折形式の1つであり、形動詞を主要部とする節は連体修飾句としても名詞句としても働く³。

(23)や(24)に示すように、形動詞には動詞の文法範疇のうち多くのもの、すなわち肯否・時制・主語の人称および数が標示されうる。

(23) *on-u* *nahaa* *baalaa-bak-kutu-gar* *kærdæh-æ-byñ*
それ-ACC 過度に 強いる-NEG:PRS-2PL-DAT 頼む-PRS-1SG
「そのことをあなた方が無理に強くないよう私は願うする」

(24) *saxa* *buhab-u-n* *ul-batax-pu-ttan*
サハ ナイフ-POSS.3SG-ACC 買う-NEG:VN.PST-1SG-ABL
olus *xomoj-o* *sanaa-but-um*
とても 悲しむ-CVB 思う-PST-1SG
「私は自分がサハのナイフを買わなかったことを、とても残念に思った」

² 態の接辞には、使役接辞・受身接辞・再帰接辞・相互共同接辞がある。アスペクトの接辞には、多回接辞、強意接辞、完了接辞がある。これらはいずれも動詞語幹に付加する派生接辞である。

³ サハ語の非定形動詞について詳しくは江畑 (2013a) を参照されたい。

統語的派生接辞による派生語には、否定・時制・主語の人称および数が標示されることが無い。派生語に所有接辞（所有者の人称・数を標示する）が付加されることがあるが、以下で明らかにするように、この所有接辞は主語の人称・数を標示するものではない。

(25)では、統語的派生接辞により派生した行為名詞 *etii*「言うこと」および *sabakalaahum*「推測すること」に所有接辞が付加されている。この例に限って言えば、所有接辞は *et*「言う」および *sabakalaa*「推測する」の動作主の人称・数に対応するため、所有接辞が主語標示を行っているかのように見える。

- (25) *kiniler* *et-ii-leri-ger* *olokur-an* *beje-m*
 彼ら 言う-NMLZ-POSS.3PL-DAT 基づく-CVB 自身-POSS.1SG
sabakalaa-hum-mu-n *et-ie-m*
 推測する-NMLZ-POSS.1SG-ACC 言う-FUT-1SG
 「彼らが言うことに基づいて、私自身の推測を言おう」

一方(26)において、同じく統語的派生接辞の付加した行為名詞 *iitii*「飼育」に付加された 3SG 所有接辞は、動作対象である *taba*「トナカイ」を指示している。この例から、行為名詞に付加される所有接辞が必ず動作主を指示するとは言えないことが分かる。

- (26) *syryn* *žaruk-put* *taba* *iit-ii-te*
 主な 生業-POSS.1PL トナカイ 育てる-NMLZ-POSS.3SG
 「私たちの主な生業はトナカイの飼育だ」

行為者名詞の場合には、形動詞との違いがより明確である。派生語自体が動作主に相当する意味を表すため、それに付加される所有接辞が動作主の人称・数を指示することはありえないからである。(27)の行為者名詞 *kæmælæhææčy*「補佐役」に付加された 3SG 所有接辞は *prezident*「大統領」を指示するが、この例での「大統領」は *kæmælæs*「助ける」の動作主ではありえない。一方、(28)において形動詞に付加された 3SG マーカーは必ず「大統領」（すなわち動作主）を指示し、それ以外の解釈を許さない。

- | | | | |
|------|--------------------|-------------------------|---------|
| (27) | <i>prezident</i> | <i>kæmælæh-ææččy-te</i> | [統語的派生] |
| | 大統領 | 助ける-ACTOR-POSS.3SG | |
| | 「大統領の補佐役」 | | |
| (28) | <i>prezident</i> | <i>kæmælæh-ær-æ</i> | [形動詞] |
| | 大統領 | 助ける-VN.PRS-3SG | |
| | 「大統領が助けること／大統領の助け」 | | |

5.3 品詞を変える派生と段階的脱範疇化

Malchukov (2006) は、品詞を変える派生において脱範疇化 (deategorization) と再範疇化 (recategorization) が相互に独立しておりかつ段階的なパラメータであると見る。この考えに従うと、例えば動詞からの名詞化における再範疇化の度合いは段階的である。サハ語の名詞化においても、語彙的派生、統語的派生、形動詞の3者は、動詞の文法範疇のうちどこまでを保持できるかにおいて段階的に異なっていることが分かる。さらにこの違いは、機能類型論の立場から見た動詞の文法範疇の階層に位置づけることが可能である。

図1に、Malchukov (2006) の示す動詞の文法範疇の階層とサハ語の名詞化における脱動詞化の度合いとの相関を示す。形動詞は、動詞の文法範疇のうち illocutionary force (IF) を表す力を失うものの⁴、その他の文法範疇の標示はすべて保持しうる。統語的派生では Mood (否定) および Tense を標示できないが、Aspect よりも左側の文法範疇を保持する。語彙的派生では、元の動詞の語彙的意味のみが保たれる。

	V - VAL - Voice - ASP - Tense - Mood - AGR - IF
形動詞	----->
統語的派生	----->
語彙的派生	->

[図1] サハ語の統語的派生における文法範疇の保持

⁴ サハ語の illocutionary force は動詞の法あるいは文末接語により表されるが、いずれも主節述語にのみ標示可能であり、形動詞には標示できない。

このように統語的派生は、屈折形式と語彙的派生との中間的な性質を有すると言える。Koptjevskaja-Tamm (2005) の指摘によれば、行為名詞は通言語的に屈折形式と派生形式の中間的存在であり、それには屈折と派生を区別する基準が適用されにくい傾向がある。サハ語の統語的派生接辞による出勤名詞は、極めて生産的な点や動詞の文法範疇を部分的に保持する点では屈折的でもあり、まさに屈折形式と派生形式の中間的存在と言える（この点については 7.1 節でも改めて取り上げる）。サハ語の統語的派生に関して興味深いのは、行為名詞だけでなく行為者名詞（4.2 節）および可能名詞（4.3 節）も同様に、屈折形式と派生形式の中間的存在として振る舞う点である。

6. 周辺諸言語における統語的派生

統語的派生は、サハ語だけに見られるものではない。本節では、トゥバ語、コリマ・ユカギール語、シネヘン・ブリヤート語、日本語にも統語的派生が見られることを示す⁵。

6.1 トゥバ語における名詞からの統語的派生

トゥバ語は、サハ語と同じくチュルク系の言語である。以下の例で示すように、この言語でもいくつかの派生接辞は複数接辞に後続することが可能である⁶。つまりトゥバ語でも、第 3 節で示したサハ語の統語的派生と同様の現象が見られる⁷。

⁵ トゥバ語はロシアのトゥバ共和国を中心に分布するチュルク系の言語である。コリマ・ユカギール語はロシアのサハ共和国北東部およびマガダン州北部などに分布する系統不明の言語である。シネヘン・ブリヤート語は中国内蒙古自治区に分布するモンゴル系の言語である。

⁶ 本稿におけるトゥバ語の例は、筆者がトゥバ語母語話者の Arzhaana Syuryun 氏と共同で行った口頭発表中のデータに基づいている。

⁷ 管見の限りでは、サハ語・トゥバ語を除くチュルク諸語において、派生接辞が複数接辞に後続することは無い。ただし Erdal (2004: 139) は、Old Turkic において複数接辞に派生接辞 *-siz*（欠如を表す）が後続する例を挙げている（この欠如を表す接辞は、サハ語やトゥバ語では失われている）。なお梅谷 (2012) によれば、モンゴル語ハルハ方言においても、*propriative* の接辞が複数接辞に後続しうると言う（モンゴル語の *propriative* の接辞は、3.1 節のサハ語の *-LEEX* に極めて類似した特徴を持つ）。

- (29) *ool-dar-ŕig* *ada#ie-ler* *oočur-da* *tur-gan(-nar)*
 boy-PL-PROP parents-PL line-LOC stand-PST(-PL)

「息子たちを連れた両親たちが列に並んでいた」

- (30) *kiži-ler-zig* *daš-tar-ni* *čřip* *tur-du-vus*
 man-PL-SIM stone-PL-ACC gather:CVB stand-PST-1PL

「私たちは人のような石を集めていた」

6.2 ユカギール語およびブリアート語における動詞からの統語的派生

サハ語とは系統の異なるコリマ・ユカギール語やシネヘン・ブリアート語においても、第4節で論じたサハ語の統語的派生と同様の現象が見られる。以下では両言語において、動詞からの派生名詞が依然として項を保持している例を示す。コリマ・ユカギール語の例(31)は長崎 (2013: 50) からの引用である。シネヘン・ブリアート語の例(32)は山越 (2012: 100) からの引用である（ここではグロスをわずかに改変してある）。

- (31) *tet-ul* *ket'ii-l-ool* *el= pundu-lek*
 2SG-ACC 連れて来る-E-NMLZ NEG= 話す-PROH

「[私が] お前を連れて来たことを話すな」

- (32) *x'ənəw* *uze-gsie-d* *xedii* *bai-g-aa =b*
 映画:INDF 見る-ACTOR-PL いくつ いる-E-PTCP.IPFV=Q

「映画の観客はどれくらいいた？」

これらの例は、サハ語の統語的派生と極めて類似している。実際に山越 (2012: 101) は、(32)の行為者名詞を派生する接尾辞-*gsie*を「統語的派生を行う派生接尾辞」と呼んでいる。

6.3 日本語における動詞からの統語的派生

日本語においても、語基である動詞部分が依然として項構造を支配する派生、すなわち統語的派生が可能である。本節では現代日本語の派生接辞のうち「-

ながら」「-がち」「-ない」「-たい」に的を絞って議論を進める。なお日本語の例は特に断らない限り筆者の内省に基づく。

日本語記述文法研究会 編 (2008: 162) も指摘するように、「ながら」には付帯状況を表す用法と逆接を表す用法がある。本稿では付帯状況を表す接辞「-ながら」に議論を限定する⁸。「-ながら」が接辞であることは間違いないが、屈折接辞であるのか派生接辞であるのかという点には問題が残る。管見の限りでは、日本語の研究でこの点を明確にするものは限られている⁹。以下では、「-ながら」による形式の動詞的性格と副詞的性格について具体的に検討してみよう。

まず動詞的な性格を見ると、(33)に示すように項を支配することが可能である。一方、主節から独立した主語を取ることは無く、テンス・アスペクト・丁寧さを表す形式を含むことが不可能であり、否定も不可能である（詳しくは高橋 (2003: 254) を参照されたい）。そもそも「-ながら」による形式は、用言の最大の特徴である活用をしない。「-ながら」による派生語の動詞としての性格は極めて限定されている。

- (33) アルバイトを しながら 大学に通う [影山 (1993: 329)]
arubaito=o si-nagara daigaku=ni kayou

「-ながら」による派生語は、高橋 (2003: 253) では「もっぱら連用的につかわれる語形」とされる。しかし村木 (1991: 67) や城田 (1998: 175) も指摘するように、属格「=の」が後続し連体修飾することも可能である。(34)のように、連体修飾の際にも動詞部分が項構造を支配するという特徴を失うことは無い。

- (34) ラジオを 聞きながらの 勉強 [村木 (1991: 67)]
radio=o kiki-nagara =no benkyou

⁸ 宮岡 (2002: 83) が示すように、付帯状況の「ながら」は接辞であるが、逆接の「ながら」は接語である。例えば後者は、「学生ながらプロ顔負けだ」のように名詞にも後続しうる。

⁹ 「-ながら」を派生接辞であると述べるのは、村木 (1991: 66) や城田 (1998: 175) など一部の研究に限られるようである。ただし両者とも接辞の「-ながら」(付帯状況)と接語の「=ながら」(逆接)を形態素として区別していない。日本語記述文法研究会 編 (2008: 249) などでは、「-ながら」の付加した形式は副詞節を形成する述語であると分析される。

派生接辞「-ながら」のこのような性格は、4節で見たサハ語の統語的派生と同様に捉えることが可能である。すなわち、派生接辞「-ながら」は、動詞の文法範疇のうち一部を保持したままの統語的派生を許すものである。具体的に見ると、「子供を遊ばせながら」「雨に降られながら」のように、派生の語基にはボイスを含みうる一方で、「子供を遊ばせていながら」「雨に降られていながら」のようにアスペクト形式を含んだ場合には逆接の意味になる¹⁰。従って付帯状況を表す接辞「-ながら」は、Malchukov (2006) の示す動詞の文法範疇の階層のうちボイスの文法範疇までを保持する形式であることが分かる。

「-ながら」と同様に派生接辞「-がち」「-ない」「-たい」も、動詞の文法範疇のうち一部を保持したままの統語的派生を許す形式と見なすことが可能である¹¹。これらの接辞が付加しても、語基部分は依然として項を支配しうるからである。「-ない」と「-たい」に関しては、(36)および(37)に示すように、後方にさらに派生接辞が付加しても依然として項を支配しうる。

(35) 最近 感謝を 忘れがちだ
saikiN kansya =o wasure-gači =da

(36) 現場を 知らなさに 驚いた
geNba=o sira-na-sa=ni odoroi-ta

(37) 文句を 言いたげな 様子
monku=o ii-ta-ge-na yoosu

日本語の「-ながら」「-がち」「-ない」「-たい」は、生産的・規則的に付加する点、派生の語基が依然として項を支配する点において、第4節で論じたサハ語の統語的派生と極めて類似している。

¹⁰ なお、進行を表す際には全体が二語となる。その証拠に、「子供を遊ばせてはいながら」のように、接語が介入しうる。

¹¹ 「-ない」を派生接辞であると見なすのは、Block (1946)、村木 (1991: 61)、風間 (1992)、ナロク (1998)、益岡 (2000: 186)、宮岡 (2002: 77) などである。「-たい」を派生接辞であると見なすのは、Block (1946)、風間 (1992)、益岡・田窪 (1992: 69)、ナロク (1998)、益岡 (2000: 186)、宮岡 (2002: 77) などである。

7. まとめ：形態論における統語的派生の位置づけ

筆者はこれまで、サハ語の一部の派生接辞は通言語的な特異性を有すると主張し、これを「統語的派生」と呼んできた。本稿では、統語的派生とはどのような性質のものであるのか改めて明確に示し、さらには周辺諸言語にも極めて類似の現象が見られることを指摘した。

筆者は統語的派生を「語の形態的緊密性に反し、派生の語基の有する文法範疇を部分的に保持することが可能な派生」と定義した。統語的派生の特異性は、次の2点に顕著に現れる。[1] 名詞からの派生においては、派生接辞が複数接辞に後続しうる。[2] 動詞からの派生においては、派生の語基が依然として統語的な力を有しており項構造を保持しうる。本節の以下の部分では結論として、一般言語学における統語的派生の位置づけを行う。

7.1 屈折と派生の中間的存在としての統語的派生

形態論研究では、屈折と派生とが必ずしも離散的なものではなく、むしろ連続的であるという主張がしばしばなされる。さらにその上で、通言語的に屈折に特徴的な指標および派生に特徴的な指標が挙げられる¹²。これら先行研究で挙げられる指標のうちの4つを取り上げて、統語的派生が屈折的であるのか派生的であるのか検討してみたい（ここで派生的とは語彙的派生に近い性質を有することを指す）。

[1] 生産性および規則性。統語的派生は、極めて生産的かつ規則的に動詞語幹に付加し、その表す意味も規則的である。この点で統語的派生は屈折的である。

[2] 語基の文法範疇。統語的派生は、語基である動詞部分の文法範疇を部分的に保持することが可能である。この点で統語的派生は屈折的である。

[3] 品詞転換。統語的派生は、品詞（屈折体系）を変えるものである。この点で統語的派生は派生的である。

¹² 詳しくは Bybee (1985: 81-89), Bauer (1988: 73-87), Spencer (1991: 9), Katamba (1993: 206-212), Haspelmath (1996), Booij (2006), Haspelmath and Sims (2010: 90)などを参照されたい。

[4] 義務性. 統語的派生は、義務的ではない. この点で統語的派生は派生的である.

すなわち統語的派生は、屈折とも語彙的派生とも部分的に特徴を共有するものである. 語彙的派生との違いとして、統語的派生は生産的かつ規則的であり、さらには複数接辞への皇族や項構造の保持など、語基の文法範疇を部分的に保存するという特質を有する. これらの点では、統語的派生は屈折と共通している. しかしながら、品詞を変えることから分かるように、統語的派生は語形変化ではなくあくまでも語幹形成のプロセスであり、義務的な要素でもない. これらの点で、統語的派生は屈折とは異なるものである.

[表 1] 統語的派生の位置づけ

語彙的派生	統語的派生	屈折
非生産的 文法範疇を失う	生産的・規則的 文法範疇を（部分的に）保持	
	語幹形成・品詞転換 義務的ではない	語形変化 義務的

7.2 語を超える派生としての統語的派生

近年の形態論研究では、語の有する特性として形態的緊密性 (lexical integrity) が論じられる. Booij (2009) は語の形態的緊密性に含まれる 1 つの特徴として「語の内部構造への接近不可能性」(non-accessibility of word-internal structure) を挙げているが、統語的派生はこれに反するものである. 語の一部である語基に対して複数接辞を付加したり、語基部分が項を支配したりするからである.

派生語の一部に対する修飾が許されることは、bracketing paradox の名で知られる. 以下に Spencer (1988) からの例を 2 つ挙げる. (38) について言えば、意味的には *atomic* が *science* を修飾しそれを入力とする派生が行われるが、語構成上は派生接辞 *-ist* があくまで *science* のみに付加しているため、意味と構造のずれが生じているのである.

(38) *atomic scient-ist*

(39) *transformational grammar-ian*

しかしながら(38)や(39)のような単に修飾語を含む構造からの派生は、通言語的に珍しい現象とまでは言えない。サハ語の語彙的派生接辞によっても、(40)のように修飾語を含む派生は可能である。

(40) *kavkaz* *kih-tiŋi* 「カフカス人っぽい」
カフカス 人-っぽい

(38)から(40)までの例と対比することで、統語的派生の特異性はより明確になる。すなわち、単に語を超える要素を入力とすることではなく、派生の語基の有する文法範疇を部分的に保持することが、統語的派生の最大の特徴だと言える¹³。統語的派生の研究は、形態論研究に一石を投じうるものである¹⁴。

¹³ 影山 (1993: 326-331) は単に修飾語を含む派生を「句の包摂」と呼び、6.3節で論じた「-ながら」など語基が項構造を保持する派生を「句接辞」と呼んで区別している。

¹⁴ 時枝 (1941) の「入れ子構造」、南 (1974) の階層構造（特に従属句の構造および述語句の構造）、仁田 (1997: 142) の「包み包み込まれるという関係」あるいは「文法カテゴリの層状構造」、宮岡 (2002: 66) の「日本語も用言にかんしては、すぐれて非スロット型である」といった言及は、日本語において、語基の文法範疇を一部保持しながら派生が行われていく事実を表現したものではないかと思われる。

略号

ABL	奪格	ITER	多回体	PRS	現在
ACC	对格	LOC	処格	PROH	禁止
ACTOR	行為者派生	LOC.REL		PROP	propriative
CVB	副動詞		locative-relational	PST	過去
DAT	与格	NEG	否定	PTCP	分詞
E	插入音	NMLZ	名詞派生	SG	单数
FUT	未来	PASS	受身	SIM	similative
INDF	不定	PL	複数	VBLZ	動詞化
INST	具格	POSS	所有接辞	VN	形動詞
IPFV	不完了	POT	potential		

参考文献

- Aikhenvald, Alexandra Yurievna. (2007) Typological dimensions in word formation. Shopen, Timothy. (ed.) *Language Typology and Syntactic Description, volume 3*, 1-65. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bauer, Laurie. (1988) *Introducing linguistic morphology*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Block, Bernard. (1946) Studies in colloquial Japanese I. Inflection. *Journal of the American Oriental Society*. vol. 66(2), 97-109.
- Booij, Geert. (2006) Inflection and derivation. Brown, Keith *et al.* (eds.) *Encyclopedia of language & linguistics*. [2nd edition] vol. 5, 654-661. Amsterdam: Elsevier.
- Booij, Geert. (2009) Lexical integrity as a formal universal: A constructionist view. Scalise, Sergio *et al.* (eds.) *Universals of language today*. 83-100. Berlin: Springer.
- Bybee, Joan L. (1985) *Morphology. A study of the relation between meaning and form*. Amsterdam: John Benjamins.
- Erdal, Marcel. (2004) *A grammar of Old Turkic*. Leiden/Boston: Brill.
- Haspelmath, Martin. (1996) Word-class-changing inflection and morphological theory. In: Booij, Geert and Marle, Jaap van (eds.) *Yearbook of morphology 1995*. 43-66. Dordrecht: Kluwer.

- Haspelmath, Martin and Sims, Andrea D. (2010) *Understanding morphology*. [2nd edition] London: Hodder Education.
- Katamba, Francis. (1993) *Morphology*. New York: St. Martin's Press.
- Koptjevskaja-Tamm, Maria. (2005) Action nominal constructions. Haspelmath, Martin. *et al.* (eds.) *The world atlas of language structures*. New York: Oxford University Press.
- Malchukov, Andrej L. (2006) Constraining nominalization: Function/form competition. *Linguistics*. 44, 973-1009.
- Spencer, Andrew. (1988) Bracketing paradoxes and the English lexicon. *Language*. 64, 663-682.
- Spencer, Andrew. (1991) *Morphological theory. An introduction to word structure in generative grammar*. Oxford: Blackwell.
- 梅谷 博之 (2012) 「モンゴル語の所有を表す接辞」『北方言語研究』2号, 47-72.
- 江畑 冬生 (2011) 「サハ語(ヤクート語)の統語的派生と脱範疇化」『日本言語学会第142回大会予稿集』122-127.
- 江畑 冬生 (2012a) 「サハ語の所有を表す接尾辞-LEEX」『北方言語研究』2号, 73-90.
- 江畑 冬生 (2012b) 『サハ語名詞類の研究 —接辞法と統語機能を中心に—』東京大学博士論文.
- 江畑 冬生 (2013a) 「サハ語の動詞屈折形式とその統語機能」『北方言語研究』3号, 11-23.
- 江畑 冬生 (2013b) 「統語法から見た日本語動詞の活用体系」『人文科学研究』第133輯, 1-19.
- 影山 太郎 (1993) 『文法と語形成』ひつじ書房.
- 風間 伸次郎 (1992) 「接尾型言語の動詞複合体について」宮岡伯人 編『北の言語 類型と歴史』241-260. 三省堂.
- 亀井 孝・河野 六郎・千野 栄一 (編) (1996) 『言語学大辞典 第6巻 術語編』三省堂.
- 城田 俊 (1998) 『日本語形態論』ひつじ書房.
- 高橋 太郎 (2003) 『動詞九章』ひつじ書房.

- 時枝 誠記 (1941) [2007] 『国語学原論』 岩波書店.
- 長崎 郁 (2013) 「コリマ・ユカギール語の動詞屈折形式 一分詞の統語機能と形態一」 『北方言語研究』 3号, 41-54.
- ナロク ハイコ (1998) 「日本語動詞の活用体系」 『日本語科学』 4号, 7-30.
- 仁田 義雄 (1997) 『日本語文法研究序説：日本語の記述文法を目指して』 くろしお出版.
- 日本語記述文法研究会 (編) (2008) 『現代日本語文法 6 複文』 くろしお出版.
- 益岡 隆志 (2000) 『日本語文法の諸相』 くろしお出版.
- 益岡 隆志・田窪 行則 (1992) 『基礎日本語文法 一改訂版一』 くろしお出版.
- 南 不二男 (1974) 『現代日本語の構造』 大修館書店.
- 宮岡 伯人 (2002) 『「語」とはなにか エスキモー語から日本語をみる』 三省堂.
- 村木 新次郎 (1991) 『日本語動詞の諸相』 ひつじ書房.
- 山越 康裕 (2012) 「シネヘン・ブリヤート語の『形動詞』」 『北方人文研究』 5号, 95-111.